

たどってみよう!

造船発祥の地は

日の丸のふるさとでもあった!

白地に赤の旗。今や誰もが知る「日の丸」にも実は島津斉彬が関係していたという説もあります。世界に通用する大船として建造した昇平丸が、外国の船と区別するために掲げたのがこの旗。今の日の丸になったと言われています。



道の駅垂水付近にある近代造船発祥の地の記念碑

斉彬が愛した桜島を

借景とする庭園「仙巖園」

江戸中期につくられた大名庭園。その魅力は、桜島を築山に、錦江湾を池に見立てるといふ、他に類を見ない雄大な景観です。園内には、大砲のための反射炉をはじめ日本初のガス灯となった鶴灯籠など、集成館事業に関連したさまざまな史跡が残っています。



その一部が世界遺産にも登録される仙巖園

地図をめぐるって歴史を散歩!

維新の 鹿児島編

2018年からはじまるNHKの大河ドラマの主人公は、西郷どん。桜島のごとき人と称される豪傑の登場で、改めて注目が集まりそうなのが幕末から維新にかけての鹿児島です。今回は、薩州見取絵図として残る一枚の地図を元に幕末・維新の鹿児島を散歩してみましよう。

国を豊かにするために
集成館事業の取り組み

西郷隆盛の才能を見出し、西郷自身も最も信頼・尊敬していたと言われるのが薩摩の11代藩主・島津斉彬です。新しいものが好きで、西洋文化に造詣の深かった斉彬は、鹿児島から日本の近代化政策を進めました。その一つが、国を豊かにするために取り組んだ集成館事業。その事業の功績は今も磯地区に残っていて、産業革命遺産にも認定されています。斉彬がもうひとつ取り組んだのが、世界と対等に付き合っていくための軍事力の強化でした。

海から来る敵は海で防ぐべき
強化された軍事力

ペリーの黒船来航で海防の必要性に気づいた幕末の日本。島津斉彬は、いち早く大船造船の製造を幕府に願っています。そして、造船所をつくったのが溶岩で埋没する前の大隅半島と桜島の間海峡、現在の鹿児島市黒神町あたり。日本の近代造船の発祥の地となりました。現在、武雄市の図書館に残る「薩州見取絵図」には当時の造船所の様子が残っています。



武雄市図書館 歴史資料館蔵



三国名勝図会
(国立国会図書館ウェブサイトより)